

都市医師会長プロフィール

札幌市医師会

山光 進 先生



第106回札幌市医師会定時代議員会で、新会長に山光 進先生が選出されましたのでご紹介いたします。先生は、昭和44年札幌医科大学を卒業され、同年札幌医大第一外科に入局。昭和55年に札幌月寒病院を開設し、理事長・院長として法人運営・診療に多忙な日々を送られています。現在も日本外科学会、日本臨床外科医学会、日本癌治療学会等に所属され第一線で研鑽を積まれています。

医師会活動は、平成9年から15年まで札幌理事として、平成11年より総務部長として活躍されました。また、平成15年からは副会長として3期6年にわたり、上埜前会長を支えてられました。

平成17年6月号の札幌通信 (Gallery~Treasure Boxという趣味・宝物等のコーナー) に先生の特集記事が掲載されていました。それによりますと、先生の大切なものは、当然ながら家族 (奥様、お嬢様とコーギー犬)。貴重なものは年代物のワイン。また大変な読書家であり、おいしいワインを飲みながら読書を楽しむ“知的サーフィン”のひとつが至福の時であると述べられています。確かに先生と話をさせていただくと政治・経済・芸術・文学など多方面にわたりその豊富な知識に驚かされます。また雄弁で、自信に満ちた語りと親しみやすい笑顔には人柄がにじみ出ていて、先生の周りは常に陽気な空気を取り巻きます。

会長就任時の想いとして、「会長として一人の医師としても、患者さんの受診が容易に行なえるようにしたい。高齢者が先行きを安心して暮らせるようにしたい。良質の医療をいつでも、どこでも、だれもが受けられるようにしたい。そのために、政治的活動は不可欠であると考え。医師会員が医療を“喜びと誇りと満足感”を持って行なえるように、会員の幸せと利益を第一にと考えている」と述べられています。

われわれ医師会員も一丸となり、山光会長のリーダーシップの下、めざす医師会の姿に近づくべく尽力したいと考えます。大きな期待を込めまして新会長の紹介とさせていただきます。

北海道医報通信員
札幌市医師会広報部長 森 一也

石狩医師会

我妻 浩治 先生



石狩医師会の新しい会長に我妻先生が、平成21年4月1日に就任されましたのでご紹介申し上げます。

我妻先生は昭和49年3月に札幌医科大学を卒業され、札幌医科大学小児科に入局されました。その後昭和51年5月から市立函館病院小児科勤務、昭和54年4月から道立小児保健センター勤務、昭和55年4月小樽市保健所勤務、昭和59年7月留萌市立総合病院小児科医長を経て、昭和63年8月石狩にて“わがつま小児科”を開院されました。

開院されてからは健康診断や予防接種などの地域医療にも積極的に取り組まれてられました。温厚で誠実な人柄ですので石狩の子どもさんやお母さんたちからは、絶大な信頼を得ておられます。

我妻先生は、平成13年からは石狩医師会の副会長となられ、医師会活動にも積極的に参加され活躍されてまいりました。特に石狩市は自前の市立総合病院がありませんので、石狩市内の私的な病院あるいは開業されている医院の先生方の協力によって、平日の夜間救急診療あるいは休日や祭日の救急医療体制を維持しております。当然、会長である我妻先生が先頭になりまして、石狩市の保健・医療担当者との協議、あるいは各医療機関の先生方との意見交換や時間の調整を積極的に行っております。最近では医療環境が大きく変化しておりますので、救急を担当して下さる人材の確保あるいはシステム維持のための財源と場所の確保など、多くの解決すべき流動的な諸問題が山積しているのが現状です。しかし誠実な人柄の我妻先生であれば、山積する諸問題を周囲の方々と協力し解決されて行かれるものと期待いたしております。

趣味は、長年夏はゴルフそして冬はスキーに親しまれておられ、いずれも高いレベルの領域で楽しまれておられるようです。

ますます忙しくなりますが、石狩医師会の先頭に立ってわれわれをご指導くださることを期待いたしております。

北海道医報通信員
石狩医師会理事 土居 保幸

小樽市医師会

津田 哲哉 先生



「山椒は小粒でもピリリと辛い」は正に新会長に就任されました津田哲哉先生にぴったりの名言です。小樽生まれの小樽育ちで、生粋の小樽っ子です。

昭和58年に小樽市医師会に入会し、昭和63年1月より実家の津田小児科を引き継がれました。お忙しい中、平成3年小樽市医師会理事に就任され、学校保健部6年間、その後平成9年より17年まで当時の高橋会長の下、総務部でアルコールも飲まずに夜遅くまで独楽鼠のように働いておりました。その手腕を買われ、平成17年4月より前城会長の片腕として実力を発揮されました。特に全国的に問題になった小児救急に大変な努力をなされました。

新会長に就任されても難題は山積しております。新型インフルエンザ対策、夜間急病センターの運営。特に内科出向医の不足、公益法人制度改革そして小樽市立病院改革プラン再編・ネットワーク化協議会への対応などです。しかし、津田会長の培われた人脈は広く、そして他人に嫌な思いをさせず、愛される性格でこの難局をきつと乗り切っていただけることと信じております。特に平成21年4月より小樽市病院事業管理者に就任された病院局長並木昭義先生とは札幌医大野球部で6年間一緒に野球をした大先輩ですが、肝胆相照らす仲です。津田会長にとって、また小樽市医師会にとっても大きな力になっていただけることでしょう。

天・地・人すべて整っております。いざ出陣！！

会長職にとってやはり健康が第一です。天気の良い日のゴルフは大歓迎です。美食家の津田会長は最近食生活に注意しているとのことですが、是非悪玉コレステロールは退治していただきたい。そして定例理事会の前には定期健診を受けて、その後理事会に臨んでほしいと思います。

小樽市医師会副会長 近藤真章

余市医師会

永井 文作 先生



余市医師会第16代会長に就任された永井先生は、昭和47年北大卒業後、同大小児科医局へ入局し、小児科医としてのスタートをきりました。帯広厚生病院などの勤務を経て、昭和60年、生まれ故郷である余市町に医院を開設されました。当時に比べると子供の数もめっきり減り「暇になったよ」と笑っておられますが、それでも北後志で数少ない小児科医として診療はもちろん、各種検診や予防接種に多忙な毎日です。

そんなお忙しい先生ですが、医師会にあっては10年以上理事、副会長の要職を歴任され、会議や勉強会を休まれたことはありません。温厚で誠実な人柄とともに会員の厚い信頼を受け慕われる所以であります。

先生の会長就任を待っていたかのように新型インフルエンザ騒ぎが起きました。保健所での対策会議のため診療後、車をとぼして倶知安まで出向かなければならないこともあります。また、医師会の法人形態をどうするかということも新たな難問です。しかし、おそらくはその風貌のようにすべて円満に解決に導いてくれるものと信じております。

かつて進学校であった余市高校は数多くの才能を輩出しましたが、なかでも有名な宇宙飛行士毛利氏は先生の一期後輩です。そんな関係から、長く当医師会長、そして余市高校の同窓会長を務めた小嶋敏之先生のあとを継ぎ、現在、余市宇宙少年団々長としても活躍されています。

診療後、何よりのお楽しみだった愛犬マリちゃんとの晩酌が獣医さんの特定保健指導により自粛、出先でも9時を過ぎるとほとんど水だけの水割り漱口にしながら多くを語らず、人の話に耳を傾ける意志のつよい愛飲家の一面をお持ちです。

この春、ご子息二人がともに新たな道を歩み始めました。永井先生にとっては記念すべき年になったことであらましよう。

北海道医報通信員
余市医師会副会長 佐野 道朗

室蘭市医師会

稲川 昭 先生



平成21年3月の定時総会にて、室蘭市医師会第11代目の会長として西里前会長の後を受け、稲川昭会長が満場一致で選出されました。

稲川先生は昭和48年北海道大学を卒業され、北大小児科医局に入局、昭和56年北大分娩部助手となられ北大の周産期医療体制のさきがけとしてその一角を担っておりました。昭和59年、日鋼記念病院小児科科長として室蘭に赴任、地域の小児医療の充実とともに室蘭地域の周産期医療センターの構築に尽力され現在の地域周産期センターの礎を築かれました。

平成2年10月いな川こどもクリニックを開業され、地域の小児診療の第一線として地元での信頼も厚く、また、小児救急の一部でも担うとのお考えから土曜の午後も診療を継続されております。

現在、北海道小児科医会副会長を務めておられます。

平成8年から室蘭市医師会理事、平成16年から副会長を務め、救急医療問題や検案医問題など行政や関係機関と交渉し、当地域の医療提供体制の維持に努めておられます。

特に、救急医療の問題に関しては勤務医・開業医の双方の立場を理解し、勤務医の疲弊を軽減しながら地域住民のニーズに応えようと苦心しているところです。また、当地域では、死体検案を病院勤務医と診療所会員が持ち回りで担当しておりますが、理事の時に一年間死体検案も行っておりました。

西里前会長を『剛』とするなら、稲川会長は『柔』というイメージは小児科医としての柔和なお顔からお見受けしますが、その実は初志貫徹・何事にもぶれず、裏表のない実直な性格そのままに会運営のリーダーシップを発揮されており、絶えず地域の医療と会員の仕事をしやすくする環境を第一に掲げて活動されております。

喫緊の課題として、地域の救急体制など山積しておりますが、就任早々の新型インフルエンザ問題やレセプトオンライン請求義務化の問題など地方医師会だけでは対応できそうもない問題までも検討課題として取り上げなければならない中で、HDCP18のゴルフの腕前が上がったという話はここのところ伺っておりません。

室蘭市医師会理事 開田 博之

日高医師会

小松 幹志 先生



この度、日高医師会では役員的大幅若返りを図り、会長に若冠48歳の小松幹志先生が就任いたしましたのでご紹介いたします。

小松先生は、昭和61年札幌医科大学を卒業され同年同大学大学院（第二外科）へ入学されております。平成2年同院修了、小樽朝里病院へ勤務し、平成4年6月より米国ペンシルベニア州ピッツバーグ大学胸部心臓外科へ3年間留学しております。

その後、札幌医科大学へ戻られ救急集中治療部、外科学第二講座助手を務められ、平成11年4月には同講座講師に就かれております。

平成18年9月新ひだか町静内病院院長に就任されました。

過去40数年間、当医師会において入会2年余で会長に就任された先生は小松先生が初めてと思われすが、短期間にて先生の地域治療・保健・福祉へのパワフルな活動、情熱そして統率力を垣間みた会員の大きな信頼と期待が今回の就任になったことと思います。会員75人、鰻の寝床のような細長い地形の日高ですので、医師会の総会をはじめ各種会合・学術研修会にいかにも大勢の会員に魅力を感じて出席してもらえるかが以前よりの課題でしたが、小松先生は、常日頃より「人の和」を大切にされ実践しておりますので、この件に関しましても、エネルギーに解決してくれるものと会員の期待も大きく協力は惜しまないことと思います。

先生の趣味は、スポーツとのことで、学生時代は野球部で東医体をはじめ各種野球大会で大活躍された実績があり、当医師会の病医院対抗ミニバレー大会においてもエースアタッカーとして職員の先頭に立って汗を流して楽しく過ごしている姿も拝見しております。

このように、博学多識で実行力のある若き新会長でありますのでわれわれ会員一同さらに心をつにして新会長の下、地域住民のために尽力して参りたいと思っております。

日々、激務な小松先生ですが、ご健康には十分ご留意され益々ご活躍下されますことを御願い申し上げます。

北海道医報通信員

日高医師会理事 石井 隆司

岩見沢市医師会

倉増 秀昭 先生



岩見沢市医師会では前会長の竹内守先生の後任として倉増秀昭先生が平成21年4月より就任されました。同時に今年度より医師会会長が附属看護高等専修学校校長を兼務することとなり倉増先生が学校長に就任されました。

倉増先生は昭和27年岩見沢市生まれの56歳。昭和55年札幌医科大学卒業後、同大学整形外科に入局、道立札幌肢体不自由児総合療育センターに医長として勤務。昭和60年より三和会札幌南整形外科病院医長を経て、平成元年より地元岩見沢の倉増病院副院長、平成15年より倉増整形外科院長として外来、入院患者、手術、また北海道警察検案嘱託医としても実にご多忙な日々を送っていらっしゃいます。

会長就任にあたり、「岩見沢は市立、労災病院の若手勤務医も入会し組織率が高くその会員一人一人が丸となって知恵を出し合い、たくさんの人が参加する活動を行っていききたい。市民に対するサービスの充実を図っていききたい」と語られています。サービスの充実として救急の対応を大きな柱と位置づけ「救急病院の受け入れについて岩見沢は道内でもスムーズな対応ができていく地域です。しかし、夕張や三笠などの地域の患者が来ることもあり、緊急治療以外はドクター間のやりとりをして、地元の患者を多く診なくてはいけない」とも述べておられます。

学校長としては、看護学校の維持を柱として「准看護師育成のために力を注ぎたい」と意欲を語られます。

かような意欲を持ちご多忙な先生ですが、食べること、ご自身で料理をなさることもお好きと伺っております。よくHokkaido Walkerの情報を元に、紹介されたお店の味をご自身の舌で確かめて歩くことを楽しまれておいでで、時折先生の評価のほどをお話して下さることもございます。

ご健康に留意され、ますます活躍されますよう祈念いたしましてご紹介とさせていただきます。

北海道医報通信員
岩見沢市医師会理事 鎌田 理

美唄市医師会

井門 明 先生



平成21年4月より、前会長の志智先生の後任として、副会長の井門 明先生が新会長に就任されましたのでご紹介します。

先生は昭和61年旭川医科大学を卒業後、旭川医科大学第一内科に入局されております。その後、大学病院はもとより、国立札幌病院、国立療養所道北病院、旭川厚生病院、旭川三愛病院にて、研究、臨床研修経験を積まれました。その間、平成10年4月より2年間、米国カリフォルニア大学サンフランシスコ校心臓血管研究所に留学されております。

平成14年4月、お父様の築かれました医療法人社団井門内科医院の副院長として、故郷の地・美唄市に戻られ、平成20年4月に院長にご就任されております。美唄市民からはもちろんのこと、周辺市町村の人々からの信頼が大変厚く、連日、多くの患者様が先生を頼って来院されております。

美唄市においても、医師不足の問題を抱え、救急医療問題は特に深刻です。副会長時代、救急の窓口を市立病院に一本化し、市立病院、労災病院の先生はもとより、開業医の医師も月に一回程度、救急担当医として市立病院に出向くという形を、先生が中心となってまとめられました。

趣味は風景写真撮影、散歩、ゴルフと多彩です。休診日が同じということと一緒にゴルフを回っていただくことがあるのですが、シングル目前の腕前です。攻める時は攻め、守る時は守りきるという、常に冷静かつ大胆なプレーをされます。

40代という若きニューリーダーの誕生です。現在のこの医療の危機的状態を、大胆かつ冷静なリーダーシップにて乗り越えていただけるものと、医師会会員、美唄市民より大変期待されております。

北海道医報通信員
美唄市医師会理事 中坂 光宏

釧路市医師会

杉元 紘一 先生



釧路市医師会の新会長に杉元紘一先生が就任いたしました。医師会病院の経営から撤退するという難局の中、その手腕に大きな期待がよせられています。

先生は兵庫県尼崎市のご出身で昭和41年北海道大学医学部を卒業され第二内科に入局。昭和45年釧路赤十字病院に赴任されています。釧路をこよなく愛され、昭和52年に現在地にて杉元内科医院を開業、多くの患者さんに感謝される日々をすごされて来ました。本年5月には医院の改築となり、ご長男の重治先生が院長にご就任、ご自身は理事長としてさらなる地域医療への貢献を目指されています。

信条は『正直に』

ご家族は同郷の愛妻、禮子夫人、三人のご息はすでに独立され四人のお孫さんに恵まれております。おじいちゃんの時間はとても嬉しいようです。

趣味の囲碁は五段格、日本棋院釧路支部長として活躍されています。ゴルフはハンデ13、一昨年釧路市で開催された第41回北海道ドクターズゴルフ大会を実行委員長として指揮され、このときはシニアクラスで優勝の栄に浴しています。

医師会においては平成7年理事にご就任、平成13年副会長にご就任、それぞれ3期6年、4期8年務められ、この間担当各部門において素晴らしいリーダーシップを発揮してまいりました。今後は釧路市医師会病院移譲の完結とそれに伴う医師会本部の移転問題、ドクターヘリの運行開始に向けた取り組み、夜間急病センターの運営、救急医療体制の再構築、看護専門学校学校の運営、病院より独立した健診センターの運営等山積された多くの課題に取り組んでまいることになります。

まさにこの時、この人を私たちに与えてくれためぐり合わせに感謝しながら、会員すべての思いをひとつにして協力してゆく所存です。生来元気な方ですが先生のご健康と益々のご活躍を祈念してご紹介とさせていただきます。

釧路市医師会副会長 久島 貞一

自己紹介

根室市外三郡医師会

江村 裕司



私は昭和25年、北洋サケマス漁業の拠点根室で生まれ、幼い頃は内科開業医であった父親が車で往診する際乗り添って、患者さんから父が感謝される姿を見て育ちました。中学2年生より、根室を離れ、高校は札幌、大学は東京で過ごしました。昭和53年、帝京大学を卒業後、母校の医局に入り精神薬理学の風祭元先生に、薬の処方について厳しく指導を受けました。また「うつ病」の専門である広瀬徹也先生には、多くの症例を学びました。当時、医局員の数は少なく、夜医局に残っていると、精神科救急の患者さんが来られ、大変勉強になりました。気負いがない落ち着いた明るい雰囲気の中で、医局生活を送れたことは幸いでした。

昭和61年9月、父が亡くなり継承して根室保全クリニックと改称し、精神科クリニックを開業しました。戸惑うことが多く、職員の方に助けられ診療を続けておりましたが、平成2年9月に精神科医であった兄が亡くなり、その後江村精神科内科病院と改称して引継ぎ、今日に至っております。同時に社会福祉法人根室敬愛会理事長に就任しております。

平成3年からは、北海道警察医として死体検案の要請に対応しております。末端の街で哀愁を助長するのか、地方からの自殺者が多いような気がします。

人に言うほどの趣味はありませんが、年に数回は仲間と海水が混じる汽水湖である風蓮湖に釣りボートでカレイ釣りを楽しんでいます。ここは、カッコウ鳥がさえずり、エゾ鹿、丹頂、北キツネなどが見られ、風光明媚な楽園です。日頃の疲れがいつぱんに解消されます。

根室市外三郡医師会は、根室市と別海町(野付郡)、中標津町と標津町(標津郡)、羅臼町(目梨郡)と広範囲にわたり、会合の折には、根室市と中標津町で会場を譲り合いますので、遠方から来られる先生方には大変な御苦勞であります。地理的なハンディを乗り越え、活動性のある充実した医師会を運営して行きたいと思っております。